

社会が求める理工系人材とは誰か

CONTENTS

REPORT

産業界の視点
産業界から見た理工系人材ニーズのギャップと今後
三菱総合研究所

大学の学部学科
拡大する理学系マーケット 情報系に偏る新增設・支援事業

高校生の志向
文理選択で重要な「得意・不得意」科目
理系の仕事イメージは理系の中でも
男女で明確に方向性が分かれる

INTERVIEW
事業採択や認可申請は改革の目的を達成するための手段
大学経営コンサルティング 加藤雄次

CASE STUDIES ①
金沢工業大学／成蹊大学／昭和女子大学

CONTRIBUTION
高校における理工系人材の育成強化の取組
文部科学省 初等中等教育局 高等学校振興課 寺島史朗

CASE STUDIES ②
文京学院大学女子高等学校／京都市立京都工学院高等学校／
山形県立米沢興譲館高等学校

編集長の視点

人口減少に伴う労働供給不足が深刻化する中、成長分野を支える理工系人材の不足は国全体の死活問題となっている。

2040年には理工系人材が124万人不足すると予測される一方で、文系は余剰となることが予測されており、この「スキルのミスマッチ」の解消こそが、日本の産業競争力を左右する本質的な課題である。大学には今、社会ニーズに合わせた「質の高い教育組織への転換」と、機動的な学部改組を通じた人材供給の最適化が求められている。

こうした要請に対し、大学教育の抜本的な構造転換が加速している。文部科学省は3000億円規模の基金を投

じ「大学・高専機能強化支援事業」を推進しており、既に学部・大学院含めて延べ260件を超える理工系分野への支援が決定している。さらに、本年4月に示された「人材育成改革ビジョン」では、2040年までに大学全体に占める理工農・デジタル・保健系の定員を、現在の35%（2024年度）から5割まで引き上げるという野心的な目標が掲げられた。各大学は、自校の教育資産やブランド価値を活かしつつ、理工系シフトという難度の高い経営判断を迫られている。

高校現場もこれに呼応し、文理の枠を超えた教育改革を推進している。「情報I」の導入や「DXハイスクール」

事業を通じて、デジタルを道具として使いこなし、科学的な思考で社会の課題を解決できる人材を育成しようという動きに加え、今年2月に示された高校教育改革に関する基本方針（グランドデザイン）～2040年に向けた「N-E.X.T.（ネクスト）ハイスクール構想」においては、理工系人材育成のパイロットケースとして先導的な学びの在り方を構築する高校（以下「改革先導拠点」）を創設することが打ち出された。この改革先導拠点は3つの類型から成るが、中でも「＜類型2＞理数系人材育成支援」において、次世代の基盤となる力の育成を強力に後押しする枠組みが示されている。生徒の理工系志向が高まる中、そ

れを一時的な傾向に留めず、内発的な動機に基づく探究学習へと深化させることが焦点となる。

激変する社会が求めるのは、単なる技術の追求者ではなく、テクノロジーを社会実装し、新たな価値をデザインする力を持つ人材である。本特集では、最新のマーケットデータと教育機関の先行事例を通じ、次世代の「理工系」に必要な資質と、それを育むための新たな教育モデルとは何かを考えるヒントを提示する。産業界の要請、大学の組織転換、そして高校側の対応という三者の動向を踏まえ、社会が求める理工系人材の実像とその育成の在り方を明らかにする。

